1. 滝根町のあらまし

(1) 町のうつりかわり

わたしたちの住む滝根町に人が住みはじめたのは1万年も以前のことで、町内の一部でもこの時代の遺物が赤土（ローム層）の中から発見されています。しかし本格的に人が住んだのは縄文時代（約9000～2000年前）からで、当時の人々が恵まれた自然からの**※採集狩猟生活**をしていたことが、町内で発見された土器や石器からわかります。

日本で本格的に水田での米作りが始まった弥生時代（約2000年～1700年前）や古墳時代（1700年～1400年前）にも、人々が農耕生活をしていました。次の奈良・平安時代になると、本格的に開墾などを行い、多くの人が住み始めたらしく、日当りが良くて、水の便の良い場所はこの時期に開発されています。昔も今も人々が農業を営む土地の選定はあまり変わらないようです。

戦国時代の滝根町には神俣城や広瀬の大越城などの城あとがあり、たび重なる戦から人々はもちろん、土地や作物を守りました。また、このころから、菅谷や神俣、広瀬などの村ができました。この頃に、経済の単位として、米が日常の取り引きに使われるほど重要視されるようになりました。江戸時代は三春藩領地で、人々は阿武隈山地特有の小さな谷間の水はけの良くない水田を耕し、馬をかい、年貢という重荷や、たびたびおそう災害とたたかいながら農業を行いました。

昔の家のあと（大平）